

定価一年間300円
組合員の購読料は
組合費に含む



〒043-0056 江差町字陣屋町86-1
Tel 0139(52)0858 FAX (52)1490
発行責任者 高橋正人
E-mail: hiyamakyoso@proof.ocn.ne.jp

内部被ばくの危険から

子どもを守るぞ！



安全・安心な学校給食をめざす要請

東京電力福島第一原発事故による放射能汚染が全国的に広がり、今なお深刻な事態が進行しています。とりわけ、子どもたちの健康への影響が懸念されています。

いま、全国では、海産・農産物の放射能汚染が心配され、学校給食の安全な食材を確保できているかが問題になっています。全国のどこであっても学校給食の

安全が保たれなければならない。北海道においても安全な食材が使われるのは当然のことです。現下の事態の進行に際して、子どもたちの内部被ばくを防ぐことは何を置いても優先される必要があります。

今年四月一日から適用された厚生労働省による食品の放射性セシウム規制基準値では、飲料水1キログラム当たり10ベクレル、牛乳と乳幼児用食品が同50ベクレル、一般食品が同100ベクレルとなっています。産地における出荷前段階での放射線検査がされていても、長野県では中学校給食で使われたシイタケから170ベクレル、愛知県では幼稚園給食で使われた乾燥シイタケから1400ベクレルもの放射性セシウムが検出され、いずれも子どもたちが食べてしまったから判明していません。「市場に出回っているものは安全」という主張や立場は、もはや通じません。

現在、北海道はじめ道内の多くの自治体では、独自検査に着手できないでいます。その背景には厳しい財政事情があり、高価で高性能の検査機器の導入に

躊躇するという実情が横たわっていると言われます。しかし、子どもの命と健康、成長と将来に直結する問題を前に、足踏みにすることは許されません。「市場に出回っているから安全」ではなく、必要な検査機器の整備を図り、学校給食の安全を確保するための検査体制の確立が急がれます。国への強い働きかけを含め、道や市町村独自の早急な

取り組みが求められています。全日本教職員組合（全教）や全北海道教職員組合（道教組）は「放射能から子どもを守る提言」を留意し、各地の状況に応じた手立てが一刻も早く講じられるよう、自治体や関係者との対話をすすめています。その一環として道教組は、「子どもたちの内部被ばくを防ぐため、学校給食の安全・安心の確保をめざす要請事項」（別項）をまとめ、全道市町村への申し入れを展開する準備をすすめています。檜山においても檜山教職員組合は、町教委はじめ関係者への申し入れや対話の取り組みを行う予定です。



1. 「市場に出回っているから安全」ではなく、放射能汚染から学校給食を守るために市町村における独自の対策を講じてください。
2. 市町村で購入する学校給食の食材については、地産地消を基本に安全が確保された食材を優先的に購入するようにしてください。
3. 食材の安全を図るために、放射線検査機器の導入と整備を早急に行ってください。
4. 市町村において検査体制の確立と充実が図られるよう、検査機器導入の補助をはじめとした国や道の支援策について強く働きかけてください。

2012 国民平和大行進

核の脅威との決別を！ つながれ 世界へ

檜山の北から南へ行進

民の変化も報告されました。江差行進に

江差行進に

は三十五名が参加、道南勤医協江差診療所前前で歓迎集会。

代表して新日本婦人の会の青木敦子氏及び道南勤医協江差診療所事務長の小林栄治氏が歓迎の挨拶を述べました。両氏とも原発事故による健康被害や身近な話題に触れながら核廃絶の今日的意義を強調しました。集会後、江差町の国道とメインストリートを行進、地域住民に核廃絶の運動を呼びかけました。

通し行進者の小川氏は、今

平和行進は全国津々浦々を通り、この夏の原水爆禁止世界大会に集結されます。核兵器廃絶の願いがつながれ、世界の世論と運動に合流していきます。

回で連続六回目の行進者を務めることとなり、平和行進の思い出を語りながら、核廃絶への強い願いを訴えました。

今回は宗谷管内幌延町を出発し、北海道を北から南へ横断して檜山入りしました。行進で通るすべての自治体の首長と対話、高橋はるみ知事をはじめすべての首長が核廃絶署名に協力してくれていることを紹介しました。

平和行進は全国津々浦々を通り、この夏の原水爆禁止世界大会に集結されます。核兵器廃絶の願いがつながれ、世界の世論と運動に合流していきます。

江差町のメインストリート行く通し行進者の小川基弘氏(中央)



江差町のメインストリート行く通し行進者の小川基弘氏(中央)



通し行進者を先頭に続く北部の檜山教組組合員の隊列

二〇一二年国民平和行進が、通し平和行進者の小川基弘氏を迎え、五月三十日にはせたな町で、翌五月三十一日には江差町でそれぞれ行われました。

せたな行進には十九名が参加、せたな町民ふれあいプラザ駐車場で歓迎集会を実施しました。檜山北部の実行委員長として、檜山教組の浜口副委員長が歓迎の挨拶を述べました。挨拶の中で「日

檜山教職員が集い講演3

大阪府秋桜高校教諭 浦田直樹氏・小山民氏



教職員は、現在十四名(うち養護教諭一名)で、平均年齢は、

三五歳、教員経験の浅い先生が大半です。その十四名の先生達を全部覚えて、情報を共有しています。中には、ほとんど学校にこない子もいますが、中・高校卒業後働けないような状況の中、秋桜高校を選んで来てくれ

関わり・つながりがリー・大切にしたいこと

【答辞】 秋桜に来てから

気がつけば、秋桜に入学して三年が経とうとしています。この前来たばかりだと思っていたのに、時間が過ぎるのは早いと驚くばかりです。この学校にこんなとを決めた頃の私は、とりあえず卒業できればいい、最低限単位が取れば良いと、学校生活の内容については、全く期待していませんでした。諦めていた、ともいえるかもしれませんが、体調も悪かったし、人間関係を築く自信もなかったからです。今思い出しても当時はかわいくなかったな、と思うのですが、そんな気持ちで高校生活を初めてすぐ、忘れもしません、懇談の時の、先生方のマシンガントーク攻撃。びっくりしました。ポカンとしてました。何か想像していたのと違っていました。

先生方の学校おいでで攻撃につられてきた登校日。友だちができました。夕方まで喋り倒していました。あれ、やっぱり想像していたのと違うぞ、と思いました。三年間最低限に、淡々と過ごしていきはざだだった私の予定は、入学後一ヶ月で大きく良い方に裏切られました。当初、来れるかなと思っていた特別活動は、制覇とまでは、いかなくても、できる限り参加して、すぐに三〇時間を超えました。授業が終わった後も暗くなるまで友だちや先生方と話して、そのうち違う学年のスクーリングの日にも登校するようになりました。卒業さえできればと思っていて自分はどこにいったのか。将来の夢も行きたい進路も決めました。もっと、早くに秋桜に来れば良かったと思うほどこの三年間は、本当に楽しいものでした。卒業するのは寂しいけど、これから先、つらいことがあつたとき、秋桜で過ごした時間を思い出せば頑張っていける気さえます。

子ども。卒業さえ出来ればいいと思っていた子が人生の目標を持ち、卒業式で答辞を読むことになりました。(上の囲み) 秋桜高校は、毎日子どもが来てくれるわけじゃないし、今日あわなければ次いつ会えるかわからないのです。だから、たまに学校に来ると先生方みんなに囲まれて話しかけられます(マシンガントーク)。だから、秋桜の子も私たちは、全日制の高校よりも先生達の関わりが多いのでしよう。 小学校で大事にされているようなことがこの高校では大切にされています。発達障害があるからとかではなく、入学してきてくれた子ども達全員をどうやったら大事に出来るか、それを常に考えることが大切だと考えています。

【学習会の案内】-どなたもお気軽に！

